

中国の思想家・孟子の言葉に「人を愛する者は、人恒に之を愛し、人を敬する者は、人恒に之を敬す」とあります。また、諺に「天に向かつて唾を吐く」とあるように、良くも悪くも自分の心と行ないは、振り子のように自分に返ってくる必要があります。岩手県で介護事業を営むYさんは、資金繰りに頭を悩ませていました。そんな折、知人から倫理法人会を紹介され、入会しました。その後、倫理経営を学び、それを活かして事業を安定させたいと考え、倫理経営塾に入塾します。そこでYさんは、経営理念の大切さを痛烈に感じました。さらに塾の中で、「感謝こそが最強の気力」であると教わり、これまでお世話になった方々に思いを馳せる機会を得たのです。

会社に戻り、あたりを見わたすと、普段の景色が違って見えました。社員の顔を見たとき、今の会社があるのは社員のおかげだと心から思えたのです。感謝の思いを社員に伝えると、社員からも「ありがとう」が返ってきます。もともと頑張ります」と力強い言葉が返ってきました。それからというもの、事業は安定し、社員も増えていきました。

数年後、事業が拡大する中で、新規事業の話が進みました。しかし、新規事業はなかなか軌道に乗らず、焦りもあってか、Yさんは「なぜ、上手く皆をまとめられなかったんだ!」とリーダーを責めてしまいました。すると、リーダーは「社長にはついていきません」と怒って退職してしまい、その後、一人また一人と退職が続ききました。



我を捨て社員と地域に尽くす 高い志が未来を変える

Yさんはその状況に茫然とする中、壁に掲げてあった経営理念が目に入りました。そこには「私たちは、『報恩感謝』を心に刻み、地域と共に社会の繁栄に貢献します」とありました。Yさんは、社員への感謝を胸に社会に貢献したいと願い、事業を進めてきましたが、事業拡大ばかりに意識が向き、そのことを忘れていたのです。

倫理運動の創始者である丸山敏雄は、倫理の根本原理を次のように示しています。

他人の為に働く生活、社会のために奉仕する聖業、人類のために己を捨てる一生、これこそ唯一無二、万人幸福の絶対倫理である。これを「得るは捨つるにあり」と標榜し、これを「発頭還元の理」と抽象する。

己を顧みず、ただただ一意専心、父母のため、家のため、社会のため、人のため、人類のために、その目標が高ければ高いだけ、広ければ広いだけ、その努力の強さ正純さ、これに正比例して自ずからにして人の幸福は得られるのである。『純粹倫理原論』

この言葉は、倫理経営の核心を示しています。「得るは捨つるにあり」とは、己の我を捨て、他者や社会のために尽くすことで、結果として自分も幸福を得るという原理です。Yさんは理念を忘れ、事業拡大に偏ったとき、社員との信頼が崩れてしまいました。しかし、再び「報恩感謝」に立ち返り、社員のため、地域のために働きはじめると、社員たちは意欲的に仕事に取り組み始めました。その結果、新規事業は成功し、事業は再び成長の軌道に乗ったのです。